

いま、劇団「空間演技」で息子の大吾の演出で若手のグループが「ラガー—騒乱罪の男たち—」の稽古をしている。昭和43年10月21日の新宿騒乱事件の日から、昭和60年の山荘に偶然を装い集まった人々の物語である。

あの騒乱罪適用の日はわたしも新宿にいた。憧れの東京はとつくに色あせていた。大学には席だけは置いていたが、バイト、バイトの日々であった。あの国

際反戦デーの日、わたしは偶然に新宿にいたのである。機動隊とデモ隊とのぶつかり合いがラグビーのようであった。デモ隊は群衆1万人と合流し、駅の鉄壁や看板を倒した。投石、放火、ダイヤはまひした。もう、演劇は始めていた。

大に進学していた。寮のある三家、演出家などひと過言あるうるさい連中が集まる。それでも1次会の会場では各テーブルで和やかに食事をしながら話している。「この人はどんな映画を監督した人か」「どんな映画のシナリオを書いた人か」。探りながら当たり障りのない会話

## 話題は昔の映画に

「ラガー」を書いたのは、あ

れから17年が過ぎた昭和60年であった。あの時代を書くには、そこまでの時間がかかった。現実実はリアルである。永遠にとけない謎も、故郷でボタ拾いをした記憶すらなくしていた。好きだった人も、東京の女子リオライター、映画監督、劇作家「用心棒」。「羅生門」にな

ると賛否が分かれて難しくなる。だから避ける。深作欣二監督ならば「仁義なき戦い」。山田洋二監督は、やはり初期の作品である。

2次会になると酒が入り、辛辣になる。褒める映画がなくなり、どの映画もまな板のコイである。完璧な映画などあるわけがない。だれもが少年時代に見て感激した映画を語ろうとしない。どこかで「甘く見られるんじゃないか」といった思いがあるのかもしれない。ちよいと小難しい映画を語りたがる。洋画もしかりである。ただ、面白いことにわたしの世代の映画人でジョン・フォード監督の「駅馬車」を悪くいう人はいない。